第３章．旧齋藤家別邸庭園の構成と意匠

第１節　立地と敷地

新潟砂丘　日本海の海岸線に沿って、越後平野には角田山の東麓から村上市岩船に至るまで、およそ70 kmにおよぶ日本屈指の大砂丘「新潟砂丘」がある。もっとも内陸側の砂丘列は、縄文時代前期（約6000年前）に形成された。その後、海岸側にいくつもの砂丘列が形成されて平野部が拡大し、奈良・平安時代には現在の海岸砂丘が形成された。

成長を続ける海岸砂丘には樹木が少なく、強風による飛砂が町や村を襲った。そのため、宝暦年間（1751～64）以降、飛砂を防止するためにマツを主とした植林が継続して実施され、砂丘にそびえる松林といった、この地域を代表する景観が形成されていった。

旧齋藤家別邸は、海岸砂丘の南東に位置し、その南側斜面に面する立地である。この砂丘の南側斜面は、西大畑公園（旧新潟刑務所）の擁壁、行形亭庭園の斜面、新潟大神宮の参道斜面、旧異人池北西側の崖線（どっぺり坂）、旧新潟師範学校東側の擁壁などに連なる。

西大畑地区　砂防林が形成されると、その間の草生地を畑にして野菜などを作る者が出てきた。畑地は徐々に増加し、広々とした農地となった。これが「大畑」という地名の由来である。このような郊外であった大畑の地も、幕末期以降、砂丘の微地形に沿って街路が通され、宅地開発がすすんだ。なお、本別邸の南の街路は現在「白壁通り」と呼ばれ、行形亭、旧伊藤文吉家別邸（現・北方文化博物館新潟分館）とともに良好な町並みを形成している。

敷地内の地形的特色　旧齋藤家別邸は、上記したように敷地の北半が砂丘の尾根とその南側斜面を含んでいるが、南半は砂丘の後背湿地を含んでいる。したがって庭園敷地は、高台、斜面、低地と大きく３区分されるという特色を持つ。

南側の低地部から北側の高台までの比高差は、約7.2 mである。低地に主屋を建て、池を穿ち、平庭を造成し、高台は眺望の利く茶庭空間にしつらえ、斜面をダイナミックに利用した滝を組むなど、砂丘、斜面、低地といった地形的特色をいかんなく発揮したものといえる。この庭園構成は、本別邸に東接する行形亭でも同様の傾向を示すものの、行形亭は、庭内に点在した離れを連絡する階段で地面が分節されており、旧齋藤家別邸庭園のほうが、より明快に立地的特色を示したものといえよう。

参考文献

- 新潟市『新・新潟歴史双書６　新潟砂丘』2011年。
- 新潟市『旧齋藤家別邸基本調査報告書』2011年。

図３－１　旧齋藤家別邸庭園の立地（大正14年の都市計画区域図に加筆）

第２節　構成と意匠

庭園の全体構成と細部意匠

面積約4,500㎡の敷地内に格式の高い玄関庭、趣のある中庭（西側）、そして広大な主庭の３つが建物を中心に配置され、園路で結ばれている。主庭内の山頂には茶庭があって独立しており、特に主庭と茶庭、建築との構成上の特色は、以下の４点にまとめられる。

①主屋を南側に寄せて北側に砂丘地形を利用した主庭を築いている。庭は南面して、常に日光をあびて樹木の生育には良い環境であり建物内からは順光で庭をみることができる。

②既存の砂丘地形やクロマツ、アカマツを生かしており自然主義の思想を感じることができる。

③砂丘上に、茶庭という別世界を築いている。

④建築と庭園が一体化しており、落ち着いた佇まいを築いている。

玄関庭　重厚な瓦葺正門から正面玄関に至る広さ約50㎡の独立した空間で、中庭へはここから西側の庭門（結界）を潜り出入りする。アプローチは雪を通路脇に積んでも支障のないよう降雪に対応して幅広く取られ、御影切石（800×400mm／枚）を縦使いにして４枚並べ、両脇を細身の同切石（800×140mm／枚）で押さえ縁取りが施してある。線形は全体に緩曲線を描き、近代庭園に多くみられるモダンな意匠である。

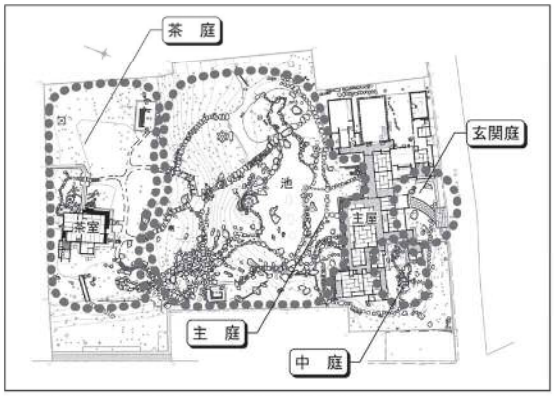

図３－２　旧齋藤家別邸庭園の全体構成

植栽はアプローチを挟んで左右両側に施され、左（西側）には大ぶりの門冠りクロマツ（幹周1.3m）を中心にモッコク大小がバランスよく植えられている。

銅製灯籠（高さ2.4m）は景色の中心で、「昭和九年戌秋造北越地蔵堂住人御釜師堀政五郎」の銘がある。景石は２石で、そのひとつは刀掛石に似た形状で銅製灯籠前に据えられ、灯入れの際の踏石も兼ねる。

他方、右（東側）の奥まった建物角隅には笠形樹冠のクロマツ（幹周1.1m）が天空を覆い、その根元に八角形灯籠（高さ2.1m）が据えられ、これが景の中心となる。景石は２石で小ぶりのものは灯籠手前に据えられやはり踏石を兼ねている。植栽は低木（サツキ類）３株のみで主構成種はモッコク８本。両クロマツはそれぞれアプローチ上に枝を差し出し、影を落として陰影のコントラストが面白い。建物際には雨落溝（自然石、加工石）が付設され、一部に那智黒石が敷かれて雨水に対応しているが、排水機能が不十分な箇所も見受けられる。全体的に格式のある趣である。

中庭　大ぶりの飛石（御影石）を軸線にしてその周りに植栽を施した平庭形式の空間。植栽は、塀際にクロマツが並び、その間をモッコクが埋めている。このクロマツは沿道から塀越しに見え、風情のある古き良き町並み景観をつくっている。モッコクは主屋近くに多く、主景木によって庭園の陰影を演出し、中庭のほぼ中央には下枝を払ったイスノキ、カリン、モミジ類が植えられ、その樹幹を通して視線をさらに先に誘う遠近効果も感じられる。カリンは子宝に恵まれる子孫繁栄を、南西角隅（裏鬼門）に植えたザクロは災いを遠ざけて吉を呼び込む家相上の意味であろうか。

図３－３　玄関庭のアプローチ

図３－４　中庭の井筒と建築外装の網代張り

ここでの主要な庭園景はふたつ。ひとつは堀井戸で、四角の井筒を配して木製の釣瓶で水を汲み上げる車井形式で、井筒を蹲踞のようにあつかい大型の海に配置する形態。また、この井筒に面した建築の壁面の外装を網代張りとする意匠は、煎茶趣味の庭園で常套的に用いられる形であり、井筒を中心とした本空間は、多分に煎茶的な様相が色濃い（図3－4）。

もうひとつは蹲踞の意匠である。司馬温公形に似る自然石の手水鉢を向鉢形式で組んでいる（図3－5）。役石は鞍馬石で三方を囲まれた建物脇に組まれ、この空間は四ツ目垣で仕切られ独立している。

役石は、手水を使うために足を置く「前石」と柄杓を使い、水を汲みやすいように組まれる「手水鉢」、手水鉢に向かって右側に寒い時に手水を使う湯桶を置く「湯桶石」、左側には夜会時に持つ手燭を置く「手燭石」がある。手水鉢と前石の間には排水用の石を敷き詰めた「海」がつくられる。ここでは、これら茶の作法をもとに伝統形式が忠実に表現されている。

主庭　主庭は、池を中心に歩き廻る池泉回遊式で、庭内には空に大きく枝を広げた老クロマツが威風堂々と林立し、その下で大小多数のモミジ類が枝葉を重ねている。市街地にもかかわらず、あたかも人里離れた深山に分け入ったかのような自然の趣がある。

全体的な特徴として、①自然地形を上手に利用し築山としたこと、②都会色を払拭して深山幽谷の世界に仕立てたこと、③滝の位置や階段の取り付け方、山頂の茶室と茶庭（外露地、内露地）の配置など全体の地割が巧みなことなどを挙げることができる。また個別的なことでは、①建物から見る美しい眺望、②水を感じることで蒸し暑い新潟の夏を快適に過ごす工夫、③常緑樹がつくる効果的な陰影と奥行き感、④庭園を歩き廻る楽しさの演出などが挙げられ、これらはおそらく庭園の計画段階から織り込まれていたものと考えられる。

正面左手奥（西側）には離れ落ち大滝があり、地元産海老ヶ折石を多数使用して豪快に組まれている。そして沢流れ、池に流水を注ぐ小滝が心地よい水音を奏で、池護岸の石組のほか所々に組まれた大小の景石や樹木の配置に作者の精錬された庭園技術と高い感性がみられる。

新潟県の庭園を特徴づける農村地域の豪農・庄屋の庭とは異なる町場という立地のなかで、庭園構成は砂丘地形やクロマツなど周りの環境を巧みに取り込んでいる。伝統技を下敷きにしながらも全体的には自然味を表現し、広大な空間をのびのびと大きく使うなど近代庭園の特徴も持ち合わせ、しかも当時、珍しかった循環ポンプの使用やコンクリートを階段部に使用するなど時代の先取りとともに豊かな発想で築造されており、その構成や意匠は巧みである。

主庭には４つの蹲踞（主屋併設の縁先蹲踞２組と、露地内の蹲踞２組）があり、庭内最大の景色の中心である大滝と合わせて見どころとなっている。

縁先蹲踞は別名「鉢前」といい、縁側または濡縁の先に設けられ、縁先手水鉢を中心とした施設を指す。「手水鉢」を中心に、貴人に対して従者が柄杓に水を汲んで差し出すために足を置く「水汲石」、水汲石の反対側に据えられる「清浄石」、水穴の掃除や水を補給するために使う「水揚石」、跳ね返りの水が縁下に入るのを防ぐ「蟄石」などの役石で構成される。

主屋１階の広間前主庭に面した縁先蹲踞は、涌泉で、溢れ出た水は細い流れを通り池に落ちる。庭園の全体構成からみて機能上重要な位置（利用、近景かつ水音を聞くなど）にある。形式は濡縁先手水の石組で、水源は現在埋設された細管を通る水道水。役石は前石に海老ヶ折石、清浄石・水汲石には佐渡赤玉石、蟄石、水鉢には鞍馬石が使用されている（図3－6）。

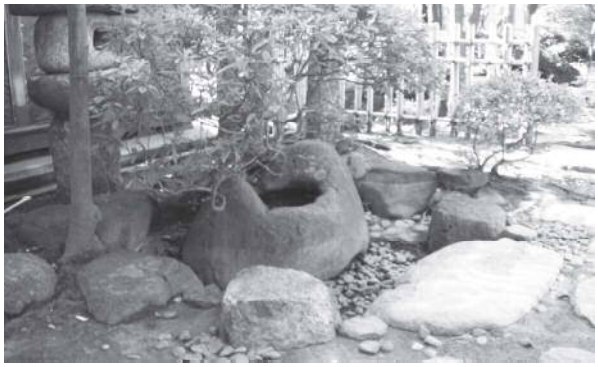

図３－５　司馬温公形に似た自然石の手水鉢

図３－６　佐渡赤玉石を用いた鉢前の構成

もともとこれらの縁先蹲踞は茶事の装置として使用されたものであるが、特に近代では茶の利用から離れて景色〈形式美の観賞〉としても多くつくられるようになった。鉢明りの灯籠との映りのバランスも良く、全体として伝統形式を忠実に表現した優れた技術は巧みである。

他方、主屋中央の廊下に付設して組まれた縁先蹲踞は、関係する建物付近が改変されたこともあり、建物や周りとの関連が断ち切れており、現在使用が困難である。もともとは主屋から濡縁または竹縁が張り出ていて、そこに縁先蹲踞として組まれたものであろう。水鉢は棗形である。鉢明りの灯籠は春日形で、石材は地元産出湯石と見えるが、そうであればなかなか出来が良く、当時、作庭に地元の石屋が関わっていることもあり、地元産景物とすれば技術的に貴重であろう。

滝には、水を落とすもの、落とさないものがあるが、いずれも自然を象徴化するもっとも日本庭園らしい景色のひとつである。滝はいつの時代も庭園景の中心であった。水の落ち方には段落ちや伝え落ち、布落ちなど自然のさまざまな様子からその形が構成されるが、ここでは離れ落ち滝石組で雄大に構成され、モミジ類などを周辺に多用して深山幽谷の世界を表現している。スケールも大きく主庭のテーマとなる自然観を強く印象付け、近世以前の精神的で抽象的な造形から離れて現時代の主流、具象的造形、すなわち「雑木の庭」と呼ばれる自然の様をそのままダイレクトに写し込む形式への転換を強く感じさせる。自然の景を取り入れる段階においては、作庭者の構想により自然の取捨選択や景色を写すうえでのシーンの美化や理想化は当然おこなわれる。人々に自然美を強く認識させる演出として、ここでは春のツツジの色鮮やかな風景や秋の紅葉など四季の移ろいのなかで、精神的な安らぎと静謐感をもたらすなど現代に通じる庭園構成の手法が講じられている。

使用されている石材は、ほとんどが地元産高級庭石と称されている海老ヶ折石である。このように多量に使用されている庭園は県内に例がない（図3－7）。

茶庭　茶庭は、北斜面の軽快な石階段を登り切った上部に拓けた平地にあり、広間・小間の２室をもつ茶室が建っている。茶庭には露地門がなく、一応、二重露地の形式ではあるが、それぞれ広間、小間の茶事に対応している。

外露地、内露地内に強風で砂がえぐられ、根がむき出しになった珍しい根上り松がみられ、内露地には四方仏の手水鉢、生込み灯籠、飛石が打たれ、全体の構成もシンプルでコンパクトにまとまっている。

外露地の東側には外腰掛待合があり簡単な雪隠が付設している。この外腰掛待合は南側に向いて建ち、木々間から主屋が俯瞰できるなど、日本庭園の構成要素である「借景」と「眺望」を基調とした「近景利用の露地」の構成ともいえる。

茶室脇に構成された内露地との境には中潜り（中門）を設け外露地と内露地を分けている。内露地には蹲踞を組み、露地としては正式な茶の形式を整えており、茶事（茶会）のために構成された庭である。

中潜り手前東側の開かれた空間については「小山の上の平地にたてた茶室めいた離れ、花崗岩のさっぱりとした高塔、芝生の線の柔らかさ、山に登る階段にセメント式の堅めを利用したりしている処に新しみが見え…」（新潟毎日新聞昭和5年5月19日）とあるように以前は明るい芝生であり、大寄せの席や流礼の席などで使用されたことをうかがわせる。以上から露地全体の作風は、露地の厳しい決めごとや形式を尊重しながらも、必ずしも茶事（茶会）のみならず、露地がもつ空間構成上の機能性や自然基調の雰囲気を求め、他用途での利用がさらに露地全体を自由で魅力的なものに

図3－7　庭園の主景となる大滝

図3－8　四方仏形手水鉢を配した蹲踞と根上がり松

仕立てていったとも推測される。

小間席前の根上がり松（古木）の株元には、中鉢形式の蹲踞（四方仏形手水鉢）が組まれている。役石の配置や土留石のあつかいは全体に意匠性に富んでいてバランスが良く、鉢明りの灯籠（六角露地生け込み形）の位置もベストで、根上がり松とともに幽玄な雰囲気も感じられ、茶室との兼ね合いでも利用しやすい。別邸庭園のなかではもっとも優れた出来栄えを感じる。また、同露地内に打たれた佐渡金山で使用された鉱石を挽く石臼を飛石に見立て利用した造形は貴重であり、地域色も出ている（図３－８）。

庭園の景観構成の特色

仰角型広角景　建物１階座敷からの眺めは、自然地形である斜面を強く印象づけている。視線は水平方向から徐々に上部へと導かれ、庭園景が 上下に展開して、より立体的に見えてくる。また、ここからは両翼に広がるワイドな景色も同時に味わえ、サルスベリ（夏を代表する花木）はここからよく見える位置、東側奥に植えられている：現在は樹木に遮蔽されていて見えない（図３－９、10、図３－13における平面図中①、およびＡ部断面図参照。以下、丸数字は図３－13の平面図における視点場の位置と対応する）。

俯瞰型集中景　２階からの眺めは、正面の樹海・紅葉谷と池の水鏡そして動きのある大滝にそれぞれ集中するように構成されている。西側小間からの眺めは、大滝の滝口一点に視線が集中しており、迫力のある景色と連動している：現在は樹木に遮蔽されていて見えない。このように１階、２階で全く違う見え方・見せ方は県内では類がなく、特に庭園全体を見下ろす景色は特異でおもしろい（図３－11、図３－13①、およびＡ部断面図参照）。

庭園の各視点場からの景観　次に庭園内における園路動線と視点場から、景観の特色について述べる。

庭園西側、橋上からの視点（図３－13②）。東西に長い池（約36ｍ）を介して奥行きを創出し、夏季はサルスベリの花が背後の深緑と好対照の趣をなす。

田舎屋までの道程と視点（図３－13③）。②から③へ筑波石でしつらえた山道（階段）を登り、山の奥へ分け入るような雰囲気を演出している。モミジ類や竹林を縫うように園路を右へ左へと振り、その先に大ぶりの筑波石が視線を引き締めている。山腹の田舎屋は、滝・流れの水音と冷気を感じさせる装置として、あたかも山中のごとき環境を知覚させている。

図３－９　俯瞰型集中景（２階正面）

図３－11　俯瞰型集中景（２階）

図３－10　仰角型広角景（１階北東を望む）

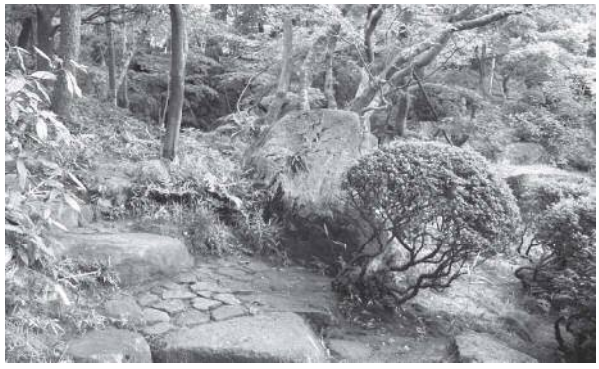

図３－12　筑波石の景石と階段、モミジの風情

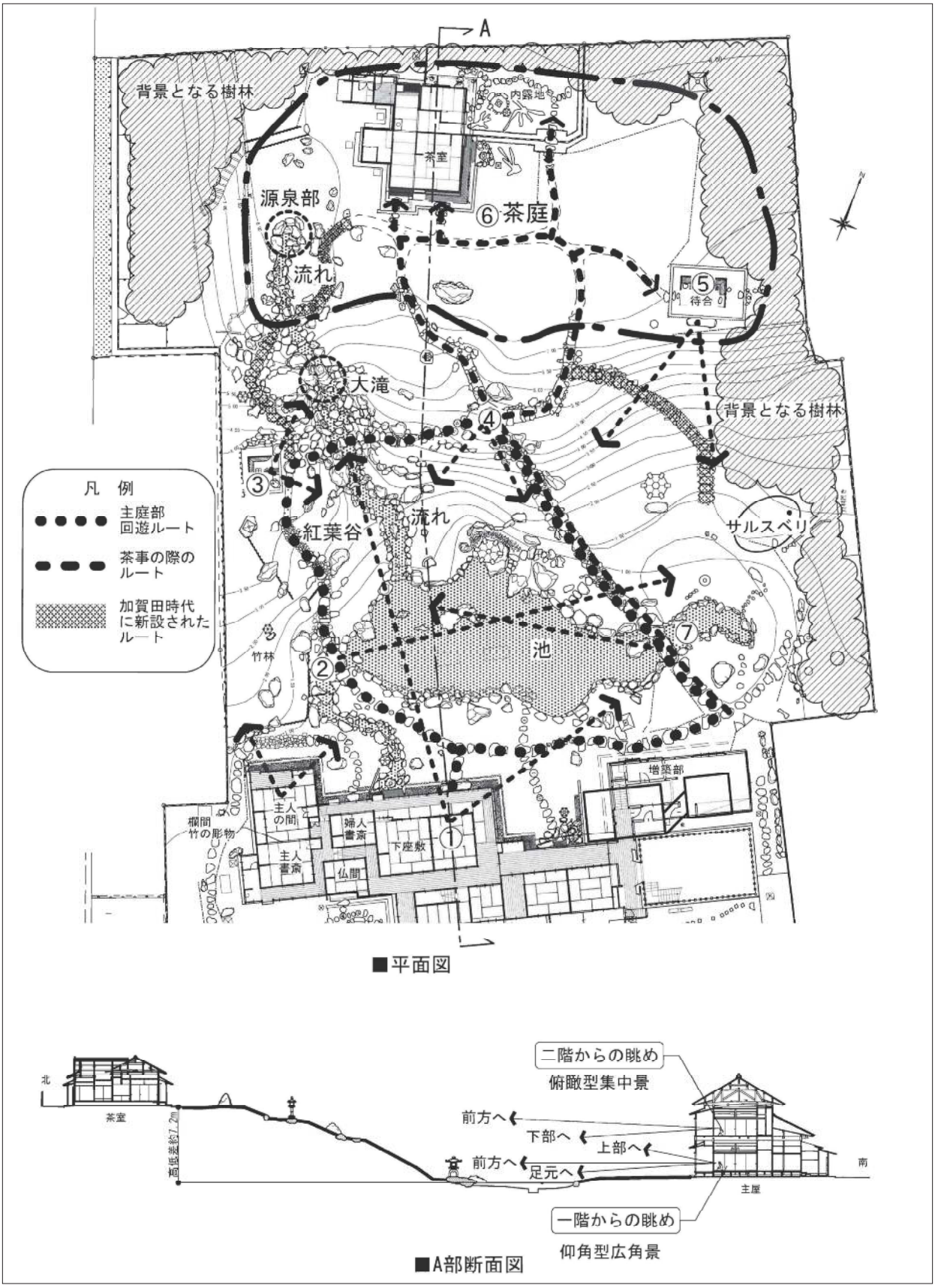

図3－13　主庭の景観構成と視点場

中腹の広場までの道程と視点（図3－13④）。田舎屋から飛石を伝い、渓谷を経て中腹に至る。中腹の広場は敷地内で唯一、四方の園路が交差する動線上の要所であり、ここからは主屋の凛とした正面性を顕在化させる視点場ともなっている。

待合からの視点（図3－13⑤）。待合は主屋の芝庭より約7.2ｍ高い場所に位置し、斜面の肩地に１石だけ据えられた礼拝石が南側への眺望（建物の甍の波と空の広さ）を認識させている。また、茶庭（図3－13⑥）も同様に山頂から南側方向に振り返る眺望を特色としている。

東側石橋上からの視点（図3－13⑦）。石橋の西側小島には「浩養園」より運んだ石製の欄干柱があり、「おなりはし」と刻まれている。この石橋は視点場のひとつであり、ここからは西側に池の水面の広がりと奥行きを感じさせ、かつ丘上へ延びる階段を隠見させることにより上部への期待感と高揚感を誘発させている。この階段は蹴上の筑波石と、踏面の洗い出しによって瀟洒な仕上げとなっている。

形式からの脱却が生んだわかりやすさ

日本庭園の系譜では、古来からの庭園形式が江戸時代後半には『築山庭造伝前篇』（北村援琴、1735）、『石組園生八重垣伝』（蘺島軒秋里、1827）で集大成されて定形化する概念が際立った。蘺島軒秋里の『築山庭造伝後篇』（1829）では「山水を愛する心得の事」「樹植やうの事」「樹造りの事」、「滝口の石の事」、「坪庭地形之図」など細部に至る空間構成を文字と絵でわかりやすく記述して、徹底した形式美の追求を目指した。

さらに明治時代に入ってからも本田錦吉郎（『図解日本庭造傳』、1890）、杉本文太郎（『純正日本庭園解説』1910，1913）らの著作やそれ以降においても、庭園の定型化や庭園の形式美を基準化して真行草の３分類に

図3－14 「自然」の美的庭園表現（田舎屋周辺）

したものがみられる。換言すれば、近代中頃前の庭園では、庭園の発生や形態そのものが限られた人達のなかで伝統色や形式美を基準として成立し、ごく限られた階層の理解と暗黙の了解によって規定され形式化されており、それゆえ庭園の深い造詣や知識力によって培われた教養が庭園の意味や形などにおいて前面に出れば出るほど、それらを身につけていないものには到底理解が難しい庭園となっていた。

また、日本庭園は国内外で今まで長いこと、わび、さび、幽玄などの言葉とともにもっとも日本的なるもののひとつとして表現されてきた。つまり、本当に説明したいのは文化や伝統といった日本的なるものであり、そのための手段として常に庭園の存在があった。だから「みる」は「観る」から「鑑賞」へ、そして「拝観」へと高尚化していき、常に「日本の高貴さ」と同次元で扱われて説明づけられてきた。一言でいうと一般的にみて日本庭園は難しかったのである。

これらをふまえて、この庭園を俯瞰すると石橋を渡り対岸に行く構成（此岸、彼岸）や各種蹲踞の組み方や滝石組、池護岸の石組、露地の構成、礼拝石や蓬莱島（池内の島）などには日本庭園古来の伝統形式がみられ、そのなかでやや崩しがあるものの「真の形式美」が追求されている。しかし、庭園全体としては構図がわかりやすく単純雄大でかつのびのびとしており、特に主庭は四季をベースに陰影のある奥山の風景や野辺の明るさを基調とした誰でも理屈抜きで分かり、美しさを味わえる「自然」が表現されており、これが新しい自然を実寸大で映し出す形式として整っている。つまり古典庭の形式主義から新しい自然主義という庭園概念（新境地）への移行を強く感じさせ、普段着の軽やかさも表現していて古風な形式美からの脱却がうかがわれる。

主要参考文献

- 京都府文化市民局文化部文化財保護課『京都市文化財ブックス第19集 庭園の系譜』2005年。
- 北尾春道『露地・茶庭』彰国社、1956年。
- 土沼隆雄『旧齋藤家別邸庭園』2011年。
- 京都造形芸術大学編『庭づくりの心と実践』角川書店、1999年。
- 鈴木貞美・岩井茂樹編『わび・さび・幽玄－「日本的なるもの」への道程』水声社、2006年。

第３節　庭石

主要な庭石

本庭園において特筆すべき庭石として海老ヶ折石と筑波石があげられる。

海老ヶ折石　阿賀野川の上流より採取された石であり、新潟の庭師のあいだでは「幻の庭石」といわれており、しわが多く色彩・表情ともに多彩である。採取地は現在、ダムに沈み採取不可能である。冨澤信明氏が所蔵する『大正九年西大畑別荘建物及庭園築造関係綴』（以下、冨澤史料と呼ぶ）には、坂本伊助なる人物からたびたび購入したことが記されている。使用箇所としては、主庭の滝石組から流れ・池の護岸といった本庭園の枢要部分に多用されている。

筑波石　茨城県筑波地方より採取される花崗岩であり、黒色で渋く落ち着きがある。大正時代初期より庭石として関東地方を中心に使用されており、新潟県内での使用は本庭園が最初と考えられる。冨澤史料に松本亀吉が筑波石を巣鴨駅より白山駅に送った運送店の伝票が複数枚綴られている。使用箇所としては、海老ヶ折石による滝石組の上流の源泉部や流れ･池の護岸、西側山路の階段及び畳石、東側山路の階段の段鼻石、また主屋北の芝庭、前庭には捨石風に据えてある。丘の上、茶室南側には本庭園最大の景石として筑波石がある。小はこぶし大のものから大は十数トンのものまで、海老ヶ折石についで重要箇所に使用されているといえよう。

そのほかの庭石

石川県柴垣海岸より採取される滝石（花崗岩）は、主屋北側の大ぶりな沓脱石･池の西側の橋石・丘の上待合前の礼拝石として個数は少ないが、庭園の要所に使用されている。新潟県内阿賀野地域より採取される安田御影（花崗岩）の古色と白色、佐渡石臼は飛石に多用されている。これらは加賀田家時代の改造時に多用されたと考えられる。

茶室周りや主屋中庭には、京都から採取される鞍馬石（花崗岩）が沓脱石、二番石、飛石として使用されている。愛媛県より採取される伊予青石（変成岩）は、池の東側の橋石として使用されている。冨澤史料より、これは浩養園の売立会にて落札され運ばれたものと考えられる。主屋北側の鞍馬石の縁先手水鉢の鉢前には佐渡赤玉石が据えられており手水鉢からこぼれる水で濡れると美しい。

図３－15　海老ヶ折石による滝石組、落差約3.8m

図３－16　源泉部、筑波石による石組

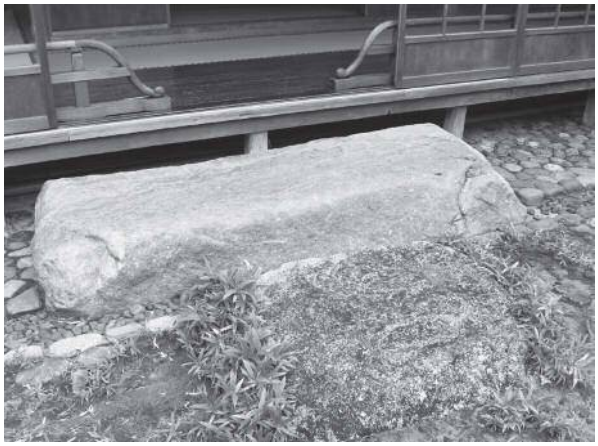

図３－17　滝石の沓脱石、二番石は安田御影（古色）

まとめ

本節では、庭園内にどのような庭石が使われているかを概述した。材料的に傑出し、名石をすこぶる多用した点に特色があるが、本庭園では石の景が勝ちすぎず、むしろ全体のなかに溶け込み、庭園姿景全体が良質な仕上がりとなっている点に、作庭者の技量の高さが評価できよう。

図3－18　主要庭石分布図